来たれ、イエス、来たれ
Komm, Jesu, komm:BWV229

解説と対訳・樋口隆一

オリジナルな資料は失われ、現在残されている最も古い資料は、おそらく1731年ないし32年に、弟子のC.ニヒェルマンによって書かれた筆写総譜である。したがって成立はそれ以前、おそらく1730年ごろとも考えられる。歌詞は本来、トマス学校長ヤコプ・トマジウス(1622-84) の葬儀のために書かれたパウル・テュミッヒ作の葬送アリアの第１節と第２節であり、そのときは当時のトマス・カントルだったヨハン・シェレ(1628-1701) によって作曲された。

バッハは葬送アリアの第１節に基づいて、華麗な二重合唱（８声）のモテトを書いた。興味深いのはバッハが音楽によって歌詞を解釈している方法だ。「身体の疲れ」はいわゆる＜ため息の音型＞で、「力の衰え」は、下降する分散和音によって、「請い願う」は複雑な和声、「辛酸の道」は暗い響きで表現しているのである。また、「あなたこそは正しい道」という箇所では８分の６拍子の喜ばしいリズムで、「真実であり生命」を歌うのである。

第２節ではふたつの合唱は統合され、四声体のコラール合唱となり、４分の３拍子の穏やかな動きの中で、霊が平安を得た喜びを歌う。

Komm, Jesu, komm,	イエスよ、どうかおいでください。
mein Leib ist müde,	わたしの身体は疲れています。
die Kraft verschwindt je mehr und mehr,	力の衰えはいや増します。
ich sehne mich nach deinem Friede;	わたしが請い願うのはあなたの平和です。
der saure Weg wird mir zu schwer!	辛酸の道程はわたしには辛すぎます。
Komm, komm, ich will mich dir ergeben,	来てください。わたしはあなたに身を委ねます。
du bist der rechte Weg,	あなたこそは正しい道、
die Wahrheit und das Leben.	真実であり生命です。
Drum schließ ich mich in deine Hände	だからわたしはあなたの御手に身を委ね、
und sage, Welt, zu guter Nacht!	申します。この世よ、おやすみと。
Eilt gleich mein Lebenslauf zu Ende,	わたしの生涯はまさに終ろうとしていますが、
ist doch der Geist wohl angebracht.	霊は安らぎの地を得ました。
Er soll bei seinem Schöpfer schweben,	霊はその作り主のもとで漂います。
weil Jesus ist und bleibt	イエスは今もこれからも
der wahre Weg zum Leben.	生命への道であられるから。

来たれ、イエスよ、来たれ・BWV229

この曲の成立は1730年頃と考えられています。歌詞はパウル・テュミッヒという人が、当時のトマス学校長ヤコプ・トマジウス(1622-84)の葬儀用に書いたアリア第１・２節が用いられています。

バッハは葬送アリアの第１節にて、歌詞の行毎の意味を"Singet..." 以上に具体的な方法で音楽表現しています。第１節６行の歌詞に付けられた音楽は、多くの場合６曲からなる組曲の構成に対応する部分があります。

歌詞第１行の「来たれ、イエスよ」は４分音符２個がスラーで結ばれた形が２度繰り返される哀願の音形、「体は疲れ」は音階の順次下降が不安な和音に収束することで表現されています。

歌詞第２行の「力の衰え」は、下降する外声の分散和音と内声の跳躍音形にて勢いの衰えが示されています。

歌詞第３行の「請い願う」では再び哀願の音形、歌詞第４行にて「辛き道」は苦悩を示す減７度の下降跳躍、その後合唱Ｉの下３パートは「重い」という単語に向かって次第に下降するなどの工夫がなされています。更には歌詞第３・４行の部分の音楽が、それぞれ歌詞第１・２行の部分の音楽に類似していますが、これはここまでの歌詞の韻律構造を考慮した結果です。

次の部分からは悲観的な雰囲気が薄れ、歌詞の意味共々音楽的にも明るさが漂います。歌詞第５行「来たれ。我は汝に身を委ねる。」からは、組曲でいうならばガボットかブーレに相当し、弾むような分散和音に始まる主題の掛け合いが合唱Ｉの各声部にひと通り現われ、その後の主題の出現にはしばしば同音を繰り返す新たな主題が伴います。この第２主題は最初の主題を模倣しており、これは最初の主題に「身を委ねる」ことを音楽的に象徴しています。

第１節最終行の「汝こそ正しき道」からは踊るようなシチリアーノあるいはジーグ（大部分の組曲では最後に置かれる）のリズムで、イエスによる救いへの期待と喜びを表現しています。

第２節では２つの合唱は４声に統合され、受難曲や教会カンタータなどで御馴染みの４声コラールとなり、 3/4拍子の穏やかな雰囲気の中で、死後の世界に平安を求める喜びが歌われます。この中にも歌詞最終行の"bleibt"「これからも～あられる」が長く伸ばされる、"Weg" 「道」に長い曲がりくねったメリスマが付いているなどの点が、言葉を音楽的に象徴しています。

解説と対訳・H.リリンク指揮「バッハ／モテト全集」(COCO-7479～80)樋口隆一氏の解説と歌詞訳
・聖書（1970年新改訳）
・音楽之友社「新音楽辞典・楽語」